評は中つてゐるであらうが、それゆゑ一層私は無茶苦茶で居れないのである。その一切が統理された天地の間に生れて居つたことが、前以ていふやうに人間は各自人間であつてそれ以外の何ものでもなく、何ものである必要もなく、尊く珍しく正しく明るい生活者である。それを知らなかつたのは誠に知らぬは亭主ばかりなりといふやうに、知らぬは私ばかりであつたのである。故に私は一日も私の眼を光あらしめたいのが、人生に先は短かくとも私の念願である。その他の何ものも今の私の人生に必要はないことである。

思ひがけなく秋には來るといふ人よ
汗拭ふ日もなく歩き秋に入る
都よりふと來る人や雁來紅
秋もいとど爐の火親しむ夜となり
あはただしう野分の夜の戸を守る

八七　馬無心人無心

玄奘三藏の馬は萬卷の經典を背負うて支那へ歸つた。そしてその經典は幾千人の人に讀まれた。然し讀んだ人と、運んだ馬と何の差異があらうか。讀んで經典を解したのでなく、讀んで好き勝手に解釋してゐるのなら、誦まずに運んだ馬と同樣ではないか。然し馬は運んだだけで讀むすべも知らぬ可愛さうな動物だと誰がきめることが出來る。讀んでゐて、可愛さうに讀むこと知らぬ人さへあるのに、誦まない馬に運ぶだけで意味なしと斷ずるのは少々早計すぎるのである。歷史人は私の生命に車の轍を殘す。私はその跡をたどりてその聖者に參ずることが出來る。今三藏の馬もその如何なる誤讀者も、私の生命には何かの足跡でないものはない。僅か七百年しかたゝない親鸞聖人の事跡や敎義ですら、今日ほど誤傳され誤觀されてゐるのは、この誤傳や誤解が、私の生命の大道

には、玄奘三藏の馬の足跡であり車の轍である。千萬人の坊主も同行も彼の馬の役だけはしてゐるのである。この馬あり、その足跡あればこそ、私は今日の已今當の往生人の數に入ることが出來たのである。こゝに馬と雖も、私の生命の歴史には一大加勢者であることを忘れられないのである。玄奘三藏は一馬の一足をも心づかいであつたやうに、私も人生の一つをも無駄だと思うてはならない。こゝに馬も車も極樂の莊嚴ならざるはない。馬無心、人無心、我亦無心の境に見出される時、花は紅、柳は綠なりで宗敎であり、生命であり、光壽二無量の天地である。

大輪の菊はくづれて佛笑み
稻の香やここに生れて死ぬ我か
蠅も來て我が肩にあり冬ごもり

八八　當然の明るさ

金子がなくてはどうもならぬといふけれど、金子でどうでもなる問題でないといふこともある。前者は金子を出す事の出來ぬ人は止めればよいし、金子のある人は出せば濟むが、後者に至つては、金子の有る人も無い人もどうにもなるものでないやうだ。然しこんな時でも、自由に生き自由に死んで行ける道が念佛道である。この分り切つた念佛が信ぜられなくて、金子ぢや學問ぢやといふけれど、それは念佛生活が分りにくいのでなく、金子に眼が眩み、學問に心が迷うてゐるからである。念佛は犬が西向けば尾は東であり、馬が小便すれや地が掘れることであり、當然が當然であるといふだけの明るさである。

八九　宗敎のための宗敎に非ず

佛法も何も知らぬ娘であつたけれど、死ぬ前三日ほどからあらゆることに感謝し、禮をいうて死んだ。死んでから禮をいうたといふのでなく、息を引きとる前に感謝し禮をいうたといふのである。たとへそれは十八年の最後の三日間であつたにしろ、人間は生きて感謝にひたる生活も出來ることを立證したのである。それに比べて、佛法を聞いた老人の死に、隨分嘘くさい死に方があると思ふ。先に行つて待つてゐるぞよ、なども阿呆らしいが、家事の行末をたのむぞなども隨分馬鹿らしい話である。而もつべこべと聞いた法話を理由に、自分の信を人前にあかし立てんとするなどに至りては正に噴飯物である。私は何んであんな未練くさい臨終をするのだらうと、久しく考へたものであつたが、この頃成程とうなづくことが出來るやうになつた。一體、彼の人達は、自分の不安を理由づけて確定せん爲の聞法の仕方で始つてゐたのである。それを限りに死んで行くのは當然なのであつた。こんなのを見ると、人間といふものは自ら不安でありながらその不安から自分といふ人間を救ひ出す所の、人間の宗教を信ずるのが嫌で、强情にも宗教の宗教を人間が重荷のやうに脊負うて、死ぬ時まであへぎ苦しんで死ぬものであることを思はされることである。それから思ふと、別に御說教を聞いたわけでもないのに若い人の死は、隨分感謝と禮とをいうて、未練なく笑うて死ぬ人があるもので、それで見ても宗教は宗教の爲の宗教でなく、人間の本來の生命の他に宗教はないものであることを知らしめらるゝことである。

サーカスの象の鼻吹く花吹雪
芽柳に釣する竿を上げにけり
沈丁花寺には人の音もせず
楊雲雀午にも近き日足かな
太子和讃に春日の照る御堂なり

喀血のやつと止りて草萠ゆる

九〇 人間を立證するなり

人間の立證する神を欲しがるのがをかしい。人間位に立證されて、やつと存在する神であるなら、人間以下であり、それは金持が下女や下男を使ふのと變ることのない心持で立證される神であるから、どんな女中を雇つてみても滿足出來ないやうに、神學が、何千年來神の證明に浮身をやつしてゐる如く、神も中々使ひにくい存在である。それに比べると、人間を立證してくれる神や佛は力强いものである。されば私には神佛の前に祈願の念願のといふ欲望も野望も有つ稚氣がないのである。神佛は私の事々を立證し、私の過現未の一切の責任を持つて下さるのである。私はたゞ大命に動かされ、その前に額づき、ひれ伏せばよいのである。それをしも不足に、別に自分の好きな神を製造してまで、私利私欲を祈るなど、千萬の神を身邊に招きよせても承知の出來る人間は居らぬのである。聞く所を慶び、獲る所を歎じて止まざりし祖聖の本願力は、これでも足らず未來迄私を善い所へやつてくれと賴むものの本心とは、とても懸け離れたものであることを忘れてはならぬのである。少くも冠を足に履くの類であるのである。

雨の桑嵩む廊下を奥へ通る
白蝶や青葉の崖を高く高く
くくとよる鷄五月雨れて我窓へ
皿に赤き櫻坊の夏となり
尿すれば風あり柳若葉かな

九一 救濟の見本

十人の說教に十色の佛が出來あがるやうである。これではどの佛を念ずべきかを怪しく思ふばかりである。十人の說教に十人の救ひあればよいのである。それなら誰も彼も一佛恩に感謝すれば足りることになる。要は人に勝れて手本になる必要はない。どんな下手な生活でも、かくの通り救はれるのだと云ふ見本になればよいのである。蓋し、人師を好む人は多いが、救濟の見本になれる人は少いのではなからうか。

前山の時雨れて雲の行來かな
勤行のほの暗き燈に朝寒し
御傳鈔の夜寒に鼻をすすりけり

九二　自由と自在

仰せに從ひ召に叶ふだけで助かるとは手易い御慈悲ぢやといふけれど、一言でも從うてゆける人間が一人でもあるだらうか。私が峠を越えるバスが怖いというたら、先生でも死ぬのが恐しいかと咎めた人があつた。これも人間が、一列に命令に從うて行ける動物ででもあるやうに買ひ被つてゐるから出る質問である。自らそれが出來ないなら、他人の出來ないことを咎める權利もなく、他人の出來ないことに不審がる必要もなく、それよりもつと自分を素直に置く必要に迫られてゐるのである。自由は決して自在でない。人間には自在は許されてあるが、自由は求めて得られる事のない不自由から出發した失望を豫想すべき希望である。自在は衆生人の自省のまゝの神力である自在である。字の如く自ら在つて足れる自己であり不足を知らない滿足であり不平なき生活である。されば佛敎の經典には自在の文字はあるが自由とは唯の一言も書いて無いのである。

梅咲くといふに降る雪五寸
暫くは戰信もなし春の雪
淡雪や鶏が踏み行く流し尻
草餅の青きを見つけ買ひにけり

九三　十人は十人ながら

誰でも助かるといふ宗教であるのに、助かつた人の助かりぶりを聞いて參考にせんとするのは愚かなことである。それは一人の助かりぶりを、皆して眞似たいのであるからである。百即百生といひ、十人は十人ながらに聞いたら、先づ自分の助つてゐない理由に明らかになり、そんな理由から手を引くべきでないか。人はその人の苦勞から手を引けば助けられるのである。手が引けぬやうに思はれてならないのが、既に既に他人の生活を參考にしてゐるからである。かくかくなつたらどうしようと心配するけれど、それは見たり聞いたりしてゐることを我が身に引きあてての心配であつて、それは他人の生活の參考を自分の生活のやうに思ふだけの心配である。十人は十人ながら一番助かり易く、手を引き易く出來てゐる人生をむづかしく思ふ所に、自分を愛するやうで粗末にして居る人間の愚昧さがある。

九四　親心知れず

夫婦喧嘩して女房が夜中に出て行つたので、亭主は三人の子を背負うて入水したが、子供は死んで親は助り、歸つて見れば女房は家へ歸つてゐたけれど首吊りしてゐたといふ話がある。結構人間の馬鹿さを見せられるやうに思うた。いやこの話だけのことではなく人間は皆んなこれ位のことしかやつてゐないのである。いや私は徒らに人生を批評してゐるのでなく、この馬鹿さが暗示する人生を、もつと近く親しく、身に浸みてみたいといふのである。これこそ、骨折らずに生き死んでも行ける所謂他力の祕め事が、露

骨に表現されてゐるのではないかと思ふのである。してみると、人間は子供ばかりが親のすることを嫌うてゐるのでなく、大人も老人も、親心知らずの子供ばかりの集りのやうな氣がするといふのである。

サイレンの尾を引く花のま晝なり
馬も午飼馬子も午飼や水温む
赤椿庭閑として閉されし

九五　説明は説迷である

『大經』の文句に卽便微笑といふ語がある。説明は首肯できるが、無説明は首肯出來ないといふ人には、この文字の表現は受取れないと思ふ。卽便とは絶信知の信知である。

凡そ人生に、物の説明で物の意得の出來た一つの事件でもあるであらうか。説明は人を迷はしめ、惑はせる效果はあるかも知れない。しかし人を悟證せしめ、信忍せしめる能力は皆無である。説明は月を指す指であつて、指は背中の子供を月から迷はしても月を見せしむる手段にはならない。世間には喧嘩を説明に依つて宥めようとする人はあるが、喧嘩ほど説明の役立たぬものはない。姑ににくまれた嫁は、どんな機嫌とりをなしても好かれるものでないほど、説明は役立たぬものである。直指深信は無説明に實在して卽便にして微笑出來るのである。煩らしい説明は、愈ゝ煩はしくするだけで、何の足しにもならないのである。説明は説迷である。説明が物を明白にするのではなく、説明に依つて、物はいよ〳〵闇くなるばかりである。笑つて見て居ればよい。笑つて交際すればよい。笑つて絶交してもよい。笑つて泣き別れしてもよいのである。

九六　私の話

長い話の後に、私へ集つた一人が、一體先生は何をいはんとして居られるかと尋ねられて、開いた口がふさがらぬことがあつた。私は只今いふやうなことをいふたのですと答へると、それはどうすればよいのですかと又問うた。私は、他人にかくせよと命ずる何物も知らない、私自身が、誰から何を命ぜられても、どんな命に服する資格もない、それ故私は人様の手本になれる人間でなく、唯かくの如き私でも、日本人であり得ると云ふ事が出來、私のやうな失敗人でも、救はれる資格があるといふ、見本として物語る他の何事もいうて居らないのである。いうた通りの私、物語つた通りの私、何も出來ない私、何もしないで生きて行ける私、犬死しても悔ない私であるといふだけである。

何か出來る人は出來ぬ人と交際は出來まい。然し私は何も出來ない限り、何も出來ない馬鹿の心事にも同情出來るのである。眞に物の出來る人なら出來ぬ人を憐み手引きすればよいのに、世の中はその反對で出來るからというて出來ぬ奴だと憎くむのである。善人だから惡人を除外するのである。不義理だというて義理人情人が排斥するのである。

してみると、人間の有つ一切の資格は、それぞれ形の變つた弱者を打つ武器のやうなものではなからうか、甚しきに至りては、一切衆生の命である念佛が、姑が嫁に面當てに放つ機關銃のやうにも響くのである。あてこすり念佛は、機關銃の連續的銃聲ととても似て聞えるのである。かくして宗教迄が勝たんが爲の武器になつてゐるとしたら、世に宗教などはなくもがなと思ふものである。私に何をいはんと欲してかくいふかと尋ねる人などは、正にそれがどんな武器になるかといふやうな質問であると思ふ。人間が冬になると、暖を取るに必要とばかり思うた綿ですら、武器の火藥になる時代であるから、人間を救ふ宗教が人間を打ち叩く武器に變化することもまた當然といへばいへるかも知れない。

日は燦々雁來紅に物干せる

葉鶏頭の丈なすに娘背延びたり
村擧げて田刈り頃なり咲く木槿
白木槿長患ひの人縁に
夢に泣く夜半の雨降り蟲の啼く
こほろぎと孫と泣き泣き夢に入る

九七　諸法無我

丸い物は誰にも丸い。角な物は誰にも角だ。自分だけの物は誰も所持し得ず、誰も悟證し得ない。我を主張し得る人間があつたら、それは悲しむべき孤獨者か、思ひきつた我が儘ものであらう。彼に我を見つけ、我に彼を見出し、我他彼此の差別なく、そんな音も立てないでこそ、人生は常に生死を越えて永遠である。

法筵の集りにくるつばめかな
山を前に小寺鐘撞く時雨かな
一山は紅葉と松と鳩に晴れ
蠅鼻を攀ぢ夢臍を廻る
落葉踏んで廻廊めぐる板の數

九八　永遠の生命

教育の、教化の、訓練のといふこともよいが、今少し内心に永遠なるものを知る生活が必要であらう。外側の形式は整ふと雖も、さしむけられただけより他に何の意味も知らないでやつてゐるものが勢揃ひしたとて、一人の楠公の出現に及ばざること遠きどころか、及ばざるものである。楠公の出現は教育の「力でなく永遠なるものの實在である。

大木が倒れて山肌がはつきりするやうに、世の中にくだらぬ勢揃ひが騒ぎ廻る時、その隙き間から見ゆる永遠の生命の出現が偉人や聖人の出現になるのである。二宮尊徳の像を百立てたからとて、小學校が闇取引をせぬ商人を製造する力はない。百の不良を防ぐ方法は決して教化や訓練の力でなく、一人の生命の實存者の力である。私は千萬の親鸞の信者といふ親鸞の利用者に一顧の價も認めない者であるが、彼の生命の生活に、私は大日本を見ることが出來、御稜威の限りなきことを仰ぐものである。一人の限りなき尊さを知らされることも、この聖人の生活の賜である。身に襤褸をまとひ道端にふるへる人を見ても合掌したくなる國民の心も、正しくこの聖人の化導なくては知られない私であつた。

僧列の殊勝さ雨晴れて烏笑ふ

柿一つ枝に殘りて年暮るる
この冬も雪の沙汰して年暮るる

紀元二千六百年
昭和十五年十二月十五日印刷
昭和十五年十二月二十日第一刷發行

白日抄
定價一圓二十錢 ㊟

著者 京都市下京區下珠數屋町烏丸東入 高岡光大船

發行者 東京市麻布區西麻布二ノ二七一二 藤井清之助

印刷者 山下謙之助

合資會社光文社印刷

版權所有

發行所 京都市下珠數屋町 丁子屋書店
電話下(5)六二一二番
振替口座 京都一四五〇番 大阪一〇二九〇番

(眞柄製本)

高光大船著　**歸命の生活**　四六判三〇〇頁　定價一圓五十錢　送料十四錢

高光大船師還暦記念出版　**時代の目足**　四六判一九〇頁　定價一圓　送料十錢

曾我量深著　**行信の道**　四六判二九〇頁　定價一圓七十錢　送料十錢

井上右近著　**三經義疏の綜合的研究**　—第一輯—　四六判三〇〇頁　定價一圓八十錢　送料十錢

松原祐善著　**群萌の心**　四六判一三六頁　定價五十錢　送料六錢

照峰馨山著　**轉身の一路**　四六判三〇〇頁　定價一圓二十錢　送料十錢

終

K.T.